

煉炭の生立ち

(一) 我が煉炭事業を初めた動機

私共が初めて煉炭の製造事業に着手したのが大正十三年で、その前に機からこの煉炭事業が将来すこぶる発展性のあるものだと言ふことを痛感し、東京の本所に煉炭の手打工場を造つたのである、その当時は、経済界が益々悪くなつて参つたのにかかわらず、我國の各家庭では燃料の大部分を占める木炭が一貫目五十銭、つまり一斗が百三十五円と言ふ高値のものを使つていた、英米では家庭燃料として石炭を使い、それが一斗三十円で非常な相違である、そこで何かこれに替るものがなくてはならないと言ふので煉炭を研究したところ、一斗三十円位で出来ることに確信を得たので、これならば大いに家庭燃料の助けになると思い初めたのが動機である、そして十三年に旧朝鮮無煙炭会社の勝田五郎氏に色々意見を聞いたのであるが、勝田氏は大阪に大同煉炭、名古屋に丸八煉炭を經營し、どちらの工場も赤字続きであつたが、それでもこの事業は非常に将来性があるから、関東の方でも是非開拓して呉れないかと云う話であつた、私は関東で朝鮮無煙炭をやつてみるが、将来他の原料炭がどんどん移入されるようなことはないだろうかと言つてみたところ、同氏は旧朝無社以外の物は絶対に内地に移入罷りならぬと云う總督府側の言明があるから他のものは入れないと云う形であつたので、それではと初めて関東に朝鮮無煙炭二千斗を入れてみた、そして一年ほど煉炭の仕事をやつてみると、其内に段々小さな工場が出来て煉炭の価格は下落する一方で、亦非常に粗悪品が出て来て、私共の工場も經營難になつて仕舞つた、併し乍ら何んとかしてこの事業をものにした一念から名古屋、大阪、九州方面まで調査に出かけた、その時の調査を基礎に、内地における煉炭事業の沿革を簡単に申述べてみる事とする

(二) 内地における煉炭事業の沿革

明治三十三年に、九州の門司で製造されたのが、我煉炭の創始とも云う可きもので、これ以前に一ツ穴煉炭を榎本武揚氏が専売特許を得られた様なことを聞いたが、それは一年ほどで遂にものならず終つたらしい、その次は明治四十年第二次的の矢張り門司の宇津木龜太郎と言ふ人が穴明煉炭の新案特許を取り丸一煉炭と銘打つて製造を開始したそれが段々と大阪、名古屋、東京に入り、大正二年から三年にかけては全国に六十有余の煉炭工場が出来た、特に東京には五十万円か百万円の工場を造る計画を立てた人が現われ、これとは別に川合と言ふ人が、通風煉炭業組合と云うものを造る様になつた、併し乍らどの工場も一年と経たない内に全部潰れて仕舞つた、何故に斯様な失敗を招いたかと云うと、煉炭は外形だけで内容が解らず、品質を考慮しないでただ安く売ることのみ力を入れた為である、そして第三次的に大正七年にまた煉炭事業が始まつた、それは第二期における大阪の山崎昭親氏、名古屋の服部万吉氏が全く行き詰つて窮地に陥つていながらもすつとやめずに継続して来た、ところが大正十三年に又同業者が採算を度外視して廉売を始めたので、全国的に行詰つてしまつた

当時の調査によれば、関東、大阪、名古屋等約三千人の煉炭屋が行き詰りを來した様だ、これはやはり小工場が雨後の筍の如く出来たのが原因で、品質等の事は更に考えずに値段の競争ばかりやつた為である、当時名古屋だけでも約二百軒の同業者が出来たのであつた、斯くの如きことを調査した結果、煉炭事業を經營するには、同じ土地で煉炭を造る同業者が一緒にになり品質の改良と販路の開拓をしなければならぬ結論を得たので、当時安宅氏他無煙炭を取扱つていた山崎芳太郎氏、三菱の大室炭を扱つていた中浜慶三郎氏等と相談の上東京煉炭業組合を設立して、品質の改良を研究規格的統一並に販路の開拓等に専念した当時東京における有力な煉炭屋を約五十軒を組合員として私が組合長、山崎氏が副、中浜氏が相談役と云う陣容で先ず良い煉炭を造ること、粗悪品製造者は販売させない様な方法を取り、優秀な煉炭の普及に乗り出し販路の開拓を期した、各家庭を戸別訪問して煉炭を火鉢にいけてやることから、そうして或る時は天狗と言ふ通風器と煉炭一個を無料でサービスすることにして「煉炭一個と通風器一個」「右此の券と引替に無料で進呈可仕候」と書いた引替券を五六万枚作り、各所に其のピラをまいたのである、当時の記憶は未だに忘れることが出来な、当時三井物産の新潟主任をしておられた坂順三氏が物産を代表して当社に専務として入られ、仕事を一緒にやることになつた、先頃まで新潟の主任であつた坂氏が、私共と一緒に浅草や本所方面でピラ撒きを始めたのである、山崎氏が今三千枚程のピラを丸ビルで撒いて来たと言ふ、私も雷門で撒いていたら警官に警察の許可を受けねばならぬと叱られる、上野に行つて撒いてると又叱られる、しまいは坂氏が警官に掴えられて、大分油をしぼられて、それを

遠くからみて、法学士の三井物産の主任であつた人が斯様な目に会うのは如何に事業の為とは言ふものの気の毒じやないかと話したこともあつた、斯様な次第で東京煉炭業組合は山崎氏や中浜氏並に私共が協力して資金を出し合い煉炭の普及を図ると共に販路の開拓に専念した、今日中浜氏が業界を去らなければならぬことになり相当大きな赤字を出したと云うことも聞きましたが兎に角悪い煉炭を追放する為、組合の煉炭には絶対粗悪品が無いことを宣伝する為に活動写真四台を用意して毎月養蚕方面や家庭方面に新販路の開拓を行つたのである、斯様な難儀をしながら、これは如何なる困難があろう共、国家的の事業であるとの見地の下にお互に命を投出して軌道に乗せる可く関係者一同邁進したのである

い、当時三井物産の新潟主任をしておられた坂順三氏が物産を代表して当社に専務として入れ、仕事を一緒にやることになった、先頃まで新潟の主任であつた坂氏が、私共と一緒に浅草や本所方面でピラ撒きを始めたのである。山崎氏が今三千枚程のピラを丸ピルで撒いて来たと言ふ、私も雷門で撒いていたら警官に警察の許可を受けねばならぬと叱られる。上野に行つて撒いていると又叱られる、しまいは坂氏が警官に掴えられて、大分油をしばらくられている、それを

速くからみて、法学士の三井物産の主任であつた人が斯様な目に会うのは如何に事業の為とは言ふものの気の毒じやないかと話したこともあつた。斯様な次第で東京煉炭業組合は山崎氏や中浜氏並に私共が協力して資金を出し合い煉炭の普及を図ると共に販路の開拓に専念した、今日中浜氏が業界を去らなければならぬことになり相当大きな赤字を出したと云うことも聞きましたが兎に角悪い煉炭を追放する為、組合の煉炭には絶対粗悪品が無いことを宣伝する為に活動写真四台を用意して毎月養蚕方面や家庭方面に新販路の開拓を行つたのである、斯様な難儀をしながら、これは如何なる困難があるう共、国家的の事業であるとの見地の下にお互に命を投出して軌道に乗せる可く関係者一同邁進したのである。

(三) 薪炭の消費規正と煉炭の使用

丁度昭和二年頃の調べによると、我國一カ年間に於ける薪の消費量は二千万ト、木炭二百万ト内外であるこの薪二千万トと木炭二百万トに必要なる用材を毎年伐つて行くと今後何十年後には、日本には一本も木が無くなつてしまふことになる、これは学者や役所の調査を基礎とした結論であり且つ、大阪商大の辻本謙之助先生等も大いにこのことを主張せられて、そこで何んとかしてこの薪炭の消費を減らさなければならぬ、それには煉炭を以つてするより仕方がない、我國では畳の上で生活しているので何処の家庭でもストーブと云う訳には行かない畳の上で使用するには煉炭が最適であると考えたのである、朝鮮では山に木が少いために河川は氾濫するし農民が燃やすものに困つていて聞くと、山東方面も見渡すかぎり樹はない、樹があるのは墓地の附近だけで内地でもこのままでは何十年後には朝鮮の如くになり山水明媚は昔のことになる、例の富士川で飛行艇と云う船に乗つた、富士川は昔は大きな船が入つたが現在では船どころではなく、プロペラを廻す飛行艇で河水は一尺位で川幅は三倍位にもなり、一寸雨が降るとハンランして困ると言ふことを同乗の農民から聞いた、それに比べて木曾川はどの様に雨が降り続いても一尺以上増水しない又どの様に炎天が続いても一尺以上減水しないと聞く、これは上流に御料林が有るからだそうである、また各地に非常に水騒動が多く群馬と埼玉の間の神流川などは千名宛両方から農民が出て水喧嘩を始め、警官が三百人も出て仲裁するのに怪我が出たとかの話がある、更に青森県は非常に山国と思つていたら昭和四年に青森県に工場を作らうと思つて行つたところが、木炭の材料がない磐城川の上流に岩木山と云う山がある、併し之も樹がない、炭焼するのが少しあるばかりである山から出て来る十三湖と云う湖水があるが少しも水が無くなりこの八月には農民が田に水がまわらないので水騒動が起り二三十人の怪我人を出し一人は即死したと言ふことである。

その頃昭和四年三月貴族院本会議で土方博士が山林一切の国営論を提議し、山本農林大臣が面喰つたと云うことを新聞が書いていたがもうこの様に樹を伐つて仕舞つては河水は氾濫するし又枯渇して仕方が無い故に之を一切国営にしなければならぬと言ふのである、こと更に私共が当時考へたのは昭和三年九月二十一日ロンドンにおいて、世界燃料会議が開かれ我が国よりも知名の方が五六名出席された、其会議の席上に於てローヂャーミス(英國)と言ふ人が日本の代表者に向つて「日本は世界の文明国であると信する然るに全国的に木材を燃やすと聞く、木材を燃やすことは非文明国のすること、木材は人類に必要欠くべからざるものでありこれを燃やすことは人類幸福の上からみて良くないから今後木炭を石炭に替へることは出来ぬか」と提唱されたと言ふことを当時の新聞誌上で知つた、この提唱に俟つまでもなく我々は凡ゆる機会に薪炭の使用をやめて石炭にする様研究願ひたいと燃料協会や貴族院の方々のおるところで説いたこともある。

その國の文明は石炭の使用量を以て知ることが出来ると思つたが、昭和三年の世界の石炭使用量をみると次の通りである。

(國名)	(使用量)	(一人当り使用量、単位ト)
アメリカ	五五〇,〇〇〇,〇〇〇	四、四
ドイツ	三三〇,〇〇〇,〇〇〇	三、三
日本	三〇四,〇〇〇,〇〇〇	二、五
イギリス	三三三,〇〇〇,〇〇〇	〇、四九

英米が四トとか云うのに対して我國は何故に斯様に少い数字であるか、それは我が國には石炭の埋蔵量が少いと思われているが、朝鮮には二十億トの埋蔵量があると云う、これはおそらく無尽蔵と云うことだろうと思つ、この様なものが大同江岸に有る、大いに之を利用して山林を助ける、そう云う訳で爾來煉炭事業に専念し、真黒になつて働き乍ら損ばかりする事業に従事して来たのである、然るに今日は三井三菱其他全國の代表的実業家が煉炭の研究をされると云うことを考えると感慨無量なるものがある、そう云う風な経路を通つて来たがとも角優良な煉炭を造らねばならぬ、どうしても煉炭の品質統一を図らないと折角大使命をおびた煉炭事業がものにならんじやないかと考へたのである、大阪には煉炭界の最も犠牲となられた故山崎照瀧氏がおられた、穴明煉炭は大阪も最も発展しなければならぬのだが大阪が

一番遅れ、川澄氏が豆炭を研究して非常に宣伝に努め、電柱から街の隅々に至るまで、川澄三筋豆炭の広告を見ない処は無い有様であった、大正九年から努力された結果は大阪の豆炭はあの程度まで賑かになつた、現在では豆炭は全国で二十五万トンの需要を喚起し穴明煉炭は七十五万トンの需要があると思う

(四)煉炭事業の将来

さて煉炭の現状はどうかと言うと木炭の全国需要二百万トンは今より十何年前のことで其後我国は年々七十万若しくは百万の人口が増加するのでどう計算しても七分五厘程度の家庭燃料が増加を来たしたものと見ねばならぬ、そうすると毎年三万ト若しくは五万ト程度の家庭燃料増加があるものとみるべきである、斯様な三万ト―五万ト程度の増加はいわゆる自然増加である、そこで我々が本當の犠牲的精神を以つてこの煉炭事業の流勢に応じ一生懸命に従事するならば一年に十萬ト位の需要増加を来たすのではなからうか、若し十萬トの需要増加が出来るのであれば薪炭或は他の石炭方面に代ることもある

私共は今日までこの煉炭事業に携つて来たが、これまで大きな利益をみたことは全くなく普及開拓のために一円が二円の宣伝費或は研究費をどうやら払つてこまやつて来たと言う程度に過ぎず、企業としてどうやら立行く姿になつた程度である、最近では煉炭が風呂用に売れて来て、東京でも一日に風呂釜が何十本も売れて行くそうである、一人当り一銭か五厘で済むので極く小さな家庭でも煉炭風呂の設備をする、而も火の元が安全で経済的であるからよこんでこの風呂が増して行く、豆炭の需要等は将来素晴らしい発展性があるのでなからうか、穴明の開拓よりも楽な様に私は考えられる

東京市は本所区だけでも八十箇町もある、それを四十箇町に全部一袋宛提供して宣伝したならば他の町内は別に力を入れて宣伝せずとも拡がるのではないか、そう云う事で東京市内だけでも相当数量が上がるじやないかと云うことを常に考えているが、遺憾ながら之から更に毎月五千円、一万円の開拓費用を出して行くこと云うことは現状では堪えられないので炭坑の皆様は何とかその開拓方法をお願いした様な次第である

朝鮮におけるこの産業を開発すると云うことは私共余りに朝鮮を離れておるので深い研究もしていないが、ただ内地が禿山になつてしまふ、河川がハンランする、これでは困る殊に武藤山治氏であつたか、ブラジルに移民政務を樹てる時に、我国は国土がせまいから何年後には米が無くなつて仕舞うと言ふことを発表された、然るに私共が上野から汽車に乗つてすぐ感ずることは千葉、埼玉、茨城県からみると樺林ばかりでまだ田や畑が開墾されていない、なぜ東京附近に樺林があるかと云うと木炭の価格が高いので其の派山の樺林から何年毎かに木炭原木に出す、ことに栃木県の田沼辺りに行つてみると畑に樺を植えておる、樺の方が収入が良いと言ふこんな状態である、国土がせまう何年かたてば米が無くなつて仕舞うと言ふ様なことはない、この燃料問題を解決すればいくらでも田畑が出来るではないか、あれを開墾すれば東京に最も近いところに非常な広漠たるところの田畑が出来る肥沃な土地がある、何んとかして薪炭を無くす方法を考慮しなければならぬ、就いては燃料協会において一年に三十万円の金なら政府から出して貰つて早く燃料を石炭に変えて貰い度いとお願ひした、ところが水源涵養費として一ヶ年僅かに十五万の金を三十万円に増加して貰つただけで仲々うまく行かなかつた

煉炭事業は斯様な苦難時代を得て今日まで進んで来たのであるが現在では一般に認められて来たことを私は心からよろこんでいるものである

之からは悪い煉炭を造ることをやめて良い煉炭を造り煉炭界に安全な船を棹さして協力一致犠牲的精神で以て進まれるならば、朝鮮の無煙炭開発も難なく出来るのではないか、そうして国家奉仕の精神を全うすることが出来ると思える私は内地において活動写真の前で何百遍といつてもいいほど、このことを一般の人々に懇えて来た、そうして何れもそれに感動して煉炭を使つて呉れることになつた、何百回かの講演において我國の山林を保護しなければならぬ、河川のハンランを防ぐにはお互が今日一日木炭を使えば山の樹を何本伐るのである、今日一日煉炭を使えば山の樹何本をたすけて農民が助かるのであると言つて来たのである

以上まとまりのつかない話であるが過去我等が煉炭事業の為に苦勞し而してこの煉炭を使うことが即ち我國木材資源の保護となることを説いた次第であるが将来共各位の御支援によつて斯業の発展を期したいと考へている(以上は昭和九年朝鮮平壤に於ける第一回無煙炭会議の席上内地の煉炭業者を代表して三鱗無煙炭専務(当時)湯口崑氏が行つた講演要旨である)

近畿地方煉豆炭工場目次

網田煉炭株式会社(兵庫県高砂市).....

ピッチ煉炭工業の

回顧と業界への希望

川 澄 政



我國のピッチ煉炭工業は現在殆んど国鉄のみを対象として経営せられているのであるが、此の国鉄とピッチ煉炭との縁結びの役を最初に勤めたのは不肖私であつて其の後兩者の關係は円満そのものであり、益々進展して國家社会に多大の貢獻をなしつつあることは洵に同慶に堪えない処である。以下搖籃期に於けるピッチ煉炭工業の育成過程を回想し併せて斯業將來に対する希望の一端を披瀝したいと思ふ、幸に読者の参考ともなれば望外の歡びである。

西歷一八四二年にフランスのヘラードギボーに初めてピッチ煉炭製造工場が建設せられた記録があつて之を以つてピッチ煉炭の起源とせられている。爾來フランスは勿論、ベルギー、英國、スペイン、イタリ、ドイツ、ロシア、米國、カナダ等の順で各都市に普及して行き其の中で(昭和九年)の統計によると世界總産額の二分の一以上を占めても特にドイツでは急激に此の事業が興隆し一九三四年(昭和九年)の統計によると世界總産額の二分の一以上を占めてゐる。言うまでもなくドイツは当時國運隆々たるものがあり尤大な熱源を確保する必要に迫られていたのみならず自國の産炭は殆んど泥炭、褐炭等の低品位炭であるから之を加工して熱効率を高めて國內需給のバランスを図らなければならぬので必然的にピッチ煉炭工業の勃興となつたのである。

我國では一八九四年(明治二十七年)にピッチ煉炭の製造法が初めて特許になつてゐるから欧米に於けるよりも約半世紀後れてピッチ煉炭に関する知識が輸入せられたことになる。然して我國はドイツと同様燃料資源に乏しい國情であるから或る程度の関心も払われ幾らか企業化するやうにも考えられたのであるが事實は之に反して殆んど見るべきものはなかつた。即當時我國の工業は全面的に頗る幼稚なものであり燃料に就いての國民の関心も至つて稀薄であつた為めに顯みられなかつたのである。

一八九七年(明治三十年)私は海軍の命で英國に渡つた。滯留期間が数ヶ月あつたので用務の閑暇を利用して英仏の主要都市を巡遊見学したのであるが偶々各地でピッチ煉炭が使用せられてゐるのを目撃して何んとなく之に強く惹き付けられるのを感じた。勿論我國で既に特許せられてゐるといつたやうなことは知らなかつたのであるから全くの新知識なりと信じていた。任務を終つて帰朝に際しては私の將來の方針を決定するかのやうに煉炭に関する原書数冊を唯一の洋行記念品として持ち帰つた程で此の時から私と煉炭との半世紀以上に亘る關係がはじまつたのである。乍然私が實際にピッチ煉炭事業に関係したのは海軍を辭した後であるから其の後十一年を経過した一九〇八年(明治四十一年)からである。

是より先一九〇〇年(明治三十三年)頃日本煉炭株式会社が創立せられ長崎市土井の首に於て極く小規模ながらピッチ煉炭工場を建設して製造を開始した。原料は天草の牛深無煙を主としたもので製品は僅かに長崎市の在留外人が家産用として需要としていた程度に過ぎない。乍然恐らく之が我國に於けるピッチ煉炭事業化の最初であると思つてゐる。其の後一九〇四年(明治三十七年)日露戦争が勃発して我海軍では軍事上の要求でピッチ煉炭工業の育成と其の確立の必要なことを痛感するに到つた。そこで同年四月から山口県徳山に海軍煉炭製造所設置に就いて委員会が設けられ設立準備が進められた翌一九〇五年(明治三十八年)四月に故武田秀雄氏が初代所長に任命せられて建設工事を完了した大嶺無煙(現在の山陽無煙)を主原料として生産開始となつたのである。之が民間企業家を強く刺激しピッチ煉炭に対

する企業熱は国力の伸長と共に、逐次上昇し前途頗る洋々たるものあるを思はしめた

即一九〇八年（明治四十一年）四月には海軍煉炭製造所に隣接して故谷口節氏を事業主とし谷口煉炭製造工場が新設せられることになった、私は之に工場長として招聘せられ工場の設計は勿論経営の第一歩から参画したのであるが之が私の煉炭事業界には入った最初である、先ず前述の長崎市土井の首の日本煉炭株式会社ピッチ煉炭工場を参観視察して具さに設計上の構想を練り充分な自信を得て工場建設に取り掛つた予定の通り建設完了と共に生産を開始したがピッチ煉炭の生命は原料の配合にあるのであるから私は之が研究に全霊を打ち込んだことは言うまでもない、爾來一九一六年（大正五年）三月谷口煉炭製造工場が海軍煉炭製造所に買取併合せられて発展的解散をするまで終始一貫知識の啓発と技術の練磨に寧日なく業績又頗る良好で満足すべき成果を収め得たものと今尙自負している、尙其の間生産したものは海軍から委託を受けたもので挙げて海軍省へ納入したのであるから海軍以外の用途には全然向けられていなかった。之より先朝鮮平壤炭田に於ける無煙炭の採掘を營業目的として設立せられていた朝鮮無煙炭鉱株式会社が自産炭を主原料として「サクシヨンエンジン」用の燃料たる特殊煉炭の生産を企図していた、私は此の事業に参画を慫慂せられたので欣然之を受諾して一九一七年（大正六年）四月渡鮮し岐陽に工場を建設して工場長に就任したのである、前述の通り主原料は朝鮮無煙炭であつて私がそれまでに経験している内地の無煙炭とは其の性状、性能に於いて大きな隔りがある、之を究明するには多大の苦心を要し私は凡ゆる角度から又凡ゆる品種に就いて研究を始め、遂に朝鮮無煙炭のみに止まらず仏印産無煙炭をも研究の対象とする必要に迫られ一九一八年（大正七年）十二月仏印に渡り約二ヶ月に亘つて代表的な炭鉱である鴻基、マオケ両炭鉱と鴻基ピッチ煉炭工場とを視察して大いに見聞を広めたのである

乍然「サクシヨン エンジン」用の特殊煉炭の需要は決して大きいものではなく企業価値に乏しいことを看取したので寧ろピッチ煉炭に転向することの必要にして且つ有意義なることを会社首脳部に熱心に提案し、遂に之を説得して一九一九年（大正八年）三月から生産を開始した、製品は早速朝鮮鉄道に試用を願出た処直ちに採択せられて試験の結果は予期以上の好成績で全生産品を挙げて納入する契約となつた、之が朝鮮の鉄道に於けるピッチ煉炭使用の嚆矢であり同時に其の当時朝鮮は我が版図であつたから我国鉄道に於ても同様に嚆矢であると言ひ得る

丁度其の当時内地では名古屋瓦 斯株式会社に於てピッチ煉炭生産の意図があり既に設備も完成して製造を始めていたが予期の製品が得られず然かも其の原因の糾明ができなくて困憊の形であつた、偶々知人の紹介で設備の改造又は製法の教示を受けたいと懇請があつたので私は之を快諾し同年十二月中旬名古屋に出張して改善に協力し翌一九二〇年（大正九年）三月までかかつて不備欠陥の是正をすることができた、そこで製品の納入先である日本陶器株式会社での製品の使用の状況及其の成果を見極めた上で帰鮮したのであるが関係各位から非常に感謝せられた

此の名古屋滞在中に再三名古屋鉄道局に出頭しピッチ煉炭を汽罐用燃料とした場合の有利な点を挙げて極力勸説し當事者も私の熱意に動かされて漸く試験することに同意せられた、そこで忘れもしないが同年三月十六、十七の両日に亘つて予め朝鮮から取り寄せて置いたピッチ煉炭を以つて名古屋、浜松間の列車運転に試験せられたのである、結果は務作の簡便なことは勿論最も重要とする経済面では夕張塊炭に比し約二割の利益があるとの結論を得て大成功を収め意気軒昂たるものがあつた、之によつて朝鮮同様内地の鉄道でもピッチ煉炭使用の道が一応拓けたのである

然るに幸か不幸か私は其の後半歳を出でずして朝鮮無煙炭礦株式会社を辭し離鮮したので暫くピッチ煉炭事業から遠ざかることとなつたが之には次のような経緯がある

當時は我国内で治山、治水の問題から山林資源の擁護育成が朝野を挙げて唱導せられていた時代で之が解決には先ず第一に家庭燃料の新炭依存の旧弊を打破しなければならぬと確信し予てから木炭に代用せられる煉炭の研究をし既に其の製法を弄明して専売特許を得ていた、之が今日人口に膾炙している豆炭である

私が暫らくピッチ煉炭から離れたのは国家的な観点から考えてピッチ煉炭の普及の方が優先せらるべきであると思ひたからである、同年十月から工場建設準備をはじめ翌一九二二年（大正十年）四月末竣工し五月から生産を開始したのであるが之が現在の川澄煉炭株式会社の創業である、然るに我国古米からの木炭依存の風習を豆炭使用に切り替えさせることは容易の業ではなく臥薪嘗胆の数ヶ年は瞬く間に過ぎ去つて了つた

斯くて一九二八年（昭和三年）に到り大阪市に於て煤煙防止の問題が大きく浮び上り都市の緑化と併せて燃料、特に石炭の合理的使用が提唱せられた、当時豆炭事業は着々其の緒に基き順調な経過を辿つていたので私は此の煤煙防止に有利害得失を離れて協力することを決意し其の方法としてはピッチ煉炭を工業用燃料として普及し一挙に此の問題を擲

決したいと念願したのである、私は先ずピッチ煉炭の見本を多種多様の用途に適合するよう幾種類も製造し之を無償で大阪能率研究所に提供し試験を仰いだ、燃焼化学の權威辻本謙之助氏、大阪府技師藤原利市氏等熱心に試験を指導せられたが結果は非常に良好で満足すべきものであつた、乍然遺憾なことには当局に於いて之が普及に熱意がなく折角盛り上つていた煤煙防止の声も低調となつて予期の成果を収め得なかつた

斯くて私は翌一九二九年（昭和四年）大阪鉄道局で國策としてピッチ煉炭の採用あるべきを力説し朝鮮鉄道に於ける実績と名古屋鉄道局に於ける嘗ての試験結果を提示して、当局の説得に是努めたのである、遂に城東線に於いて試験すること容認せられ試験の要領は実に慎重を極め数次に亘つて行われた結果は九年前に名古屋、浜松間で行われた時の

たからである。同年十月から工場建設準備をはじめ翌一九二二年（大正十年）四月末竣工し五月から生産を開始したのであるが之が現在の川澄煉炭株式会社の創業である。然るに我国古来からの木炭依存の風習を豆炭使用に切り替えさせることは容易の業ではなく臥薪嘗胆の数ヶ年は隔く間に過ぎ去つて了つた。

斯くて一九二八年（昭和三年）に到り大阪市に於て煤煙防止の問題が大きく浮び上り都市の緑化と併せて燃料、特に石炭の合理的使用が提唱せられた。当時炭炭事業は蕭々其の緒に基き順調な経過を辿つていたので私は此の煤煙防止に有利害得失を離れて協力することを決意し其の方法としてピッチ煉炭を工業用燃料として普及し一挙に此の問題を満

決したいと念願したのである。私は先ずピッチ煉炭の見本を多種多様の用途に適合するよう幾種類も製造し之を無償で大阪能率研究所に提供し試験を仰いだ。燃焼化学の權威辻本謙之助氏、大阪府技師藤原利市氏等熱心に試験を指導せられたが結果は非常に良好で満足すべきものであつた。乍然遺憾なことは当局に於いて之が普及に熱意がなく折角盛り上つていた煤煙防止の事も低調となつて予期の成果を収め得なかつた。

斯くて私は翌一九二九年（昭和四年）大阪鉄道局で国策としてピッチ煉炭の採用あるべきを力説し朝鮮鐵道に於ける実績と名古屋鐵道局に於ける嘗ての試験結果を提示して、当局の説得に是努めたのである。遂に城東線に於いて試験することを容認せられ試験の要領は実に慎重を極め数次に亘つて行われた結果は九年前に名古屋、浜松間で行われた時のものと全く同一で当局から賞讃の辞をいただき面目を施したのである。之が近時國鉄の各路線で盛んにピッチ煉炭が使用せられるようになった端緒である。因より私は此の仕事には大きな期待を懸けていたので寛大な犠牲も忍び燃えるような情熱を傾倒して漸く今一步と言う所まで漕ぎ付けたのであるが嘗て夢想だにしなかつた某財閥の実に響きすべき偉徳行為に遭ひ一九三〇年（昭和五年）以降國鉄との関係は勿論ピッチ煉炭の製造すら抛棄するの己むなきに到つた。乍然今日ピッチ煉炭工業が国家に貢献しつづつあることを見聞し転々感慨無量のものがある。私個人としては多大の犠牲を払つて然かも何等酬いられてはいないけれども天なり命なりで決して悔いてはいない。寧ろ此の事業に隠れた功績を貽したことを密かに喜んでゐる次第である。

以上を以つて私のピッチ煉炭工業に対する回想を終り以下私の体験から割出した斯業への希望の一端を少しく記述したいと思ふ、適当に取捨していただきたい。

ピッチ煉炭に限らず總ての煉炭に共通して言い得ることであるが利用価値の少い微粉炭、低品位炭等を其の物理的、化学的、性状と性能を究めて適当に配合し之を最も経済的に活用し得る状態に加工することが煉炭工業の真髓であり其の使命とする処は燃料経済に貢献すると言ふことではなければならない。殊に我国は燃料資源の貧弱な国柄で戦前の広い経済圏を擁していた時代でさえ石炭の推定埋蔵量は僅かに八〇億と云われていた程で恐らく今日では半減してゐるものと思われ、燃料資源の徹底的な保護と之が経済的利用方法の確立とは喫緊を要するものである。此の観点からするとピッチ煉炭工業の育成は片時も忽せにできないもので凡ゆる面から推進せられなければならない。

仄聞する処によれば國鉄納入のピッチ煉炭価格は現在カロリーに依つて決定せられてゐるようであるが之は間違つてゐると思ふ。当局としては大量のものを受入れるのであるから此の方法に拠らなければ整理ができないとしてゐるのかも知れないが之では真にピッチ煉炭を理解した合理的な方法とは言ひ得られない。私は機会ある毎に調証してゐるのである。

如何にカロリーが多くても不完全な燃焼をして煤煙と「シンダー」とを多量に出してゐるようでは折角包蔵してゐる熱量を無為に散逸してゐることになり煉炭としての価値は非常に減殺せられて國鉄の損失は莫大なものとなるのであるからカロリー偏重の弊は改められなければならない。

多種多様の原料炭を其の物理的、化学的、性能を究明して之を適度に配合し最も能率的に燃焼するよう創意工夫することがピッチ煉炭生産の「キーポイント」であり技術である。斯くてピッチ煉炭の研究は盛んとなり品質益々向上し本来の使命を達成することとなり其の結果は鐵道以外の用途にも需要せられるようになるのである。当局並に業者の善処を要望する次第である（筆者は川澄煉炭株式会社々長）